

---

# 間宮くんと災難日記 番外編

なお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

間宮くんと災難日記 番外編

### 【Zコード】

N8134D

### 【作者名】

なお

### 【あらすじ】

自称、世界最強の男、間宮健児と、自他ともに認める、地味野郎こと足利時宗と、自称、世界一の美貌を持つ男、花木涼。この話は、本編では、描かれない、彼らの日常をテーマに書かれた話である！足利くんは主人公である。そして、これは完全なるコメディーである。

## 第一話・間宮くんの休日（前書き）

間宮くんと災難日記をこつも読んで頂いて、ありがとうございます。

この連載は、本編とは違つ、番外編になつています。

まあ、読んでやつしてやつ（、 、 ）

第一弾は、間宮くんの休日です。

それでは、ヒツヅレー！

# 第1話・間宮くんの休日

俺の名前は、間宮健児。

(自称)世界最強を誇る間宮健兒。

誕生日は、6月15日の双子座。

シナイ山と申した

血液型は、知らないがパシリがしきりに『間宮くんは、B型だよ！絶対、B！』賭けてもいいよ！間宮くんは、絶対、B…』と言つていたので、なんかムカついて殴つてやつた。

B！B！つてB型と俺に失礼だろうが！――

大体、俺が何型だろうが、てめえには関係ねえーだろうが！

ああ……なんかムカついてきた……

今、すっけえ誰か殴りてえ!!俺の、マインサルトを食らわせて殺りてえ! ( 字が違うよ・『殺りたい』じゃなくて『やりたい』だよ・b>足利)

喧嘩（理不尽な暴力）を売る事から始まる。

さて、今日は誰が餌食になるかな？クツクツクツ…

俺の名前は、花木涼。有名私立浦沢学園の2年だ。

容姿端麗・成績優秀・おまけに運動神経抜群と、三種の神器がそろつた男だ。

神は「物を『えないと』いうが、俺は、特別だ。

影では、俺の事を『THEナルシスト』とか呼んでいるらしいが… それは、芋共のひがみだと思つてゐるので気にしない。  
俺は、ポジティブだからな。

今でも、こつして俺が歩いているだけで、みんなが振りかえる。

「ふつ… 美しさは罪だな。」

（街の人の声）

「おい！見てみろよ！あいつのかつこつ…！」

「やだ！なにあれ？ なんで、カボチャパンツに白タイツ？ キモい…」

「あいつって、坊ちゃん校の『THEナルシスト』だろ？」

「なんか、見てるこつちが恥ずかしいよな。」

（街の人の声終わり）

（フフフ、みんなが注目してゐるよ…）の俺に…なんて、いい気分なんだ…！（

（間宮 side）

「暇だから、街に来てみたのはいいが…殴りがいのある奴がいねえな？」

しゃーねえ、パシリの家にでも押しかけてやるか！！

「…ん？なんだ？ありや？なんちゅーかつにうしてんだ？」

（カボチャパンツに白タイツ？キモい野郎だな…しかも、なんかこっちに来てないか？

あきらかに俺に向かつて来てるよな？…それに、すげえガン飛ばしてるし……あれ？なんかムカついてきた。今、無性に殴りてえ…

「君が、バカ宮つて言つの？！僕の美しさの邪魔も一  
つてことで、死ねー！！」

ドカッ！！

（ 、 、 、 ）綺麗な、アッパーが決まつたぜ…）

「ああ～すつきりした！！パシリん家に行こうつと。」

（花木 side）

僕より、注目を浴びる人間なんて…

（街の人の声）

「おい、見ろよ？バカ宮だぜ…！」

「ホントだ！！史上最凶最悪の男『バカ富』だぜ！逃げよつせー。」「あいつに会わると、ろくな事にならねえよー。」

へ(\*・・)ノ

～街の人の声終わり～

ちょつ、なんでみんな逃げて行くの！  
つてか…この美しさは100倍の俺を差し置いて、注目される『バ  
カ富』って……許せない！！

この俺より、田立つ事なんて言語道断…！凶々しいにも程があるわ  
…！

ちょつと、文句言つてやる…！

「君が、バカ富つて言つの？！僕の美しさの邪魔も一  
「つて」とで、死ねー！！」

ドカッ…！

(な、なんで…)

「ああ～すつきつした…！パシリん家に行こうヒ。」

(バ…カ富…め)

『かわいそうに…自ら災難に飛んで行くとは。』街の誰もが、そう  
思つただろう…と、同時にこいつも、宇宙一のバカだなと思われる

花木涼でした。

「絶対に……復讐し……てや……る」

俺は、薄れ行く意識の中で、そう誓った。

今田も、また一人哀れな犠牲者が誕生した。

オマケ

## 足利くん宅にて

「…でも、ムカつくから殴つてやつたんだよーしかし、マジでキモい野郎だつたぜー。」

（なにやつてんだよ…休みの日まで…ってか、なんで休みの日まで俺は間宮くんと一緒にいるんだわ…）

「おい！聞いてんのか？！」

「はいはい、聞いて

「『はい』は、一回……」

ボコッ！！

「ほげー つ！！」

しかし、一番の犠牲者は、やつぱりこの男『足利時宗』だろう。休日にも関わらず、押しかけられ、殴られて…本当にツイてないと

思つ。

「あ、今日晩飯食べて帰るからな。もちろん有無は言わせない。」

（もう、やだーーー！）

月×日 晴れ（でも、心の中はつも嵐）

俺は、今、一番デスノートが欲しいです。  
誰か下さい。

終わり

## 第1話・間宮くんの休日（後書き）

いかがでしたか？次は、足利くんの日記話になります！

そつちも読んでね

それでは（・・・）

## 第2話・足利くんの日記（前書き）

番外編、第2弾になります

今回ま、足利くんの日記をテーマに書いていきます！

それでは、どうぞ

## 第2話・足利くんの日記

月 日 雨（心の中は土砂降り）

今日、間宮くんと釣りに行つた。

外は、雨だと書つのに、言い出したら聞かない『バカ宮』は、行きたくもない俺を、無理やり引きずつて、近くの釣り堀に連れていつた。

釣り堀の主人の制止も聞かずに、（まあ…正確に書つと、齊して無理やり入ったんだけど）釣りを始めた。

一匹も釣れなくて、キレた間宮くんに、釣り堀の中にダイブをせられた…冬の水は酷く冷たく危うく、死のダイブになるところだった。

そして、家に帰つた俺は、今、40の熱と戦つている。

誰か、悪魔を倒す方法を教えて下せー。

今日の間宮くんの一言

『てめえが餌になつて魚を引きつける…』

月 日 雪（心の中は吹雪）

今日、朝から猛烈に雪が降つていた。寒くて寒くて、みんな死にそうだったのに、なぜか間宮くんは、半袖短パンだった。

「見てるこいつが寒いわ！」とシッコミたくなつたが、めんどくさ

かつたので無視した。

その後、

「男なら雪合戦だ！！」とクラスの男子全員を集めて『死という恐怖』の雪合戦を始めた。

間宮くんが投げる、雪玉はメジャーーリーガー球のスピードで、みんな逃げるのに必死だつた。結局、間宮くんだけが楽しそうで、みんなは、死にそうだつた。

明日は、学級閉鎖かな…

今日の間宮くんの一言

『てめえら、死ぬ準備は出来たんだろうな？』

奴は、悪魔のように笑っていた。

×月 日 晴 (心の中では、雷時々やつぱり雷)

今日、衝撃的な事実がわかつた。

奴の誕生日は、ジャイーンと回じだと言ひ事だ！！  
やつぱり、奴は、彼と繋がつていた。

それから、奴が血液型を知らないと言つので、『間宮くんはB型だと思つ』と呴つたり、『つるわこと殴られた。まつたく理不尽な奴だ！』

けど、俺は絶対B型だと思つ…。

そして、奴の血の色は緑色だと思つ…。

今日の間宮くんの一言

『お前のモノは俺のモノ。俺のモノは俺のモノ。』

月×日 雨（心中は嵐）

誰かデスノートとい。

奴の名前を100回書きます。

今日の間宮くんの一言

『血祭りにあげてやるわー。』

月×日 曇り（心も田も霞んで見えない）

間宮死ね！バカ宮！！

いつも、俺ばつかり殴りやがって！！

なにが、ペちゃんだよ？ いい歳して恥ずかしくないのか？！

ばーか！…脳なし！…ハゲ…！

今日の間宮くんの一言

「ペコちゃんキャンディー買つて…」…3秒で

無理に決まつてんだろーー！

「オマケー

「ん？なんだこのノート？『災難日記』？」

「ああーーーそれは、ダメー見ないで間宮くんーーー！」

「ばかー見ないでと言わると見たくなるのが、人のぞ…」

……

「ま、間宮様…？」

「てめえ、よつまじ死にたいらしいな？」

ボキボキ…

「お、怒つちやい『望み通り消してやるーー』やだ…

ボキッ！バキッ！ボコッ！

間宮くんが、そう言つた瞬間に、俺は、薄れ行く意識の中で、今日の一句はこれだと思った。

終わり

## 第2話・足利くんの日記（後書き）

以上まで、読んで頂いて、ありがとうございました。

次回は、自称世界一の美貌を持つ男、花木涼の話になります

それでは、また

### 第3話・花木家の一族（前書き）

番外編の第三弾です！

花木家の一族。花木くんの家族紹介になつています。  
またしても、足利くんが犠牲になつてますんで、読んでみてね

### 第3話・花木家の一族

やあ

世界一美しい美貌を持つ花木涼だよ

今回の番外編は、俺の話らしいね。

だから、今日は君達に俺の家族を紹介するよ。  
みんな、負けず劣らずの美貌の持ち主だよ?  
まあ、でも俺が一番だけね。

ここで、簡単に説明しておくと、父が有名な資産家で、母がアメリカの大富豪の令嬢なんだよ。

若い頃は、一人とも美しいと持てはやされたらしいよ?  
まあ、年寄りの戯言だから信憑性は薄いと思うけど  
で、下に妹…が一人いてね~そいつが、変わってんの。  
結構、俺も変わり者だけど、アイツには負けるね。

まあ、取りあえずこんな家族だけど、覗いてってよ?  
つてか、覗かない…クスッ…どうなることやら。

帰りの夜道は気をつけなよ?

おっと、いけないもう一人の俺が…それじゃあ、始まり~

「で、なんで俺が花木くんに呼ばれてるの?」

「なんでって、シツコミ役だよ?」

「それだけ？！それだの為に、朝、気持ち良く寝ていた俺を拉致つてきたの？！」

（回想）

誰にも邪魔されない、日曜の朝。もう少しだけ眠。

バリーン！！

「 @ # % \$ ? !」

「足利時宗、確保！！」

「 もやあ……」めんなさい……なんか、分かんないけど謝るから命だけは……」

「 今から、連行します！」

「 なんで？！ってか何処に？！誰か、ヘルプ？！……」

（回想終わり）

「 君寝てたの？通りで、変な格好してゐなつて思つたよ？ってか、そんな服何処に売つてるの？」

（そのままの言葉を、お前に返してやるよ……）

花木くんは、貴族の格好をしています。

「 つてか、俺の部屋の窓ガラスちゃんと、弁償してよね？！」

「分かってるよ… 重ってセーフィンだね？ そんな感じじゃ、モテないよ？」

「？」

(ほつとけーー)

「で、誰から紹介すんの？ 早くしてよ？ 俺、もう帰りたい。今すぐ帰りたい。」

「もう… なら、帰してあげるよ… キミ。」

「スミマセンでしたーー！ もう、帰りたいなんていいませんーー！」

「分かればいいよ。じゃあ、行こつか？ まずは、父を紹介するよ。」

「ノンノンーー！」

「お父様！ 涼です。」

「入りなさい。」

「失礼します。」

ガチャ…

「珍しいな、お前が私の部屋に来るとは？ 何の用だ？」

「今日は、お父様を紹介しに来たんだよ。彼に」

「は、初めまして…足利時宗といいます。」

「やあ…君があの足利くんか…いつも、執事から聞いてるよ…涼と仲良くしてくれていろと。」

「いえ、そんな…」ひたちねいいつも、花木くんには、お世話になつてます。」

「本当にね。」

「……」

「すまないね…今まで好き勝手に育つてきたから我が儘で…君も大変だろ?」

「ええ、まつたぐ。」

「あ、見て?地味男君!あそこの中全然、大変じやありません!…」

「フフフ…やうか、これからも涼をお願いします。」

「あ、はい!」ひたちねい

(全然、いい人じやん!本当に花木くんのお父さん?…なんか、常識人過ぎて、ビックリしたよ)

「あ、そつだ!君にお土産をあげよつー。」

「え、いや…そんな気にしないで下さー…。」

(やつた！なんか高価なものくれるかな

( ) ( )

「これを……君ならサイズもピッタリだな。」

(つて、貴族の服じやん……こりねーーーー)

「見たところ、君は変わった服装をしているから、これを来なさい。  
貴婦人にモテるぞ？」

(やつぱり、この一人親子だ！…めつちや、そつくりだ！…くつそ  
つだ！…つか、貴婦人なんて、この日本にいるかよ！…こには、  
中世かよ！…)

「あ、着替えたまえ！」

「えつ…」

「なんだい？嫌なのかい？気に入らないのかい？この私が選んだ服  
が？」

「お父様は、自分の思い通りにならなかつたら、暴走する癖がある  
から気をつけてね？」

「ええ……早く言つてよーーー！」

「オジサン…ショックだな？せつかく君に似合つと思つたのに…燃  
やしづやおうかな…この服つてか、すべてを」

（目がマジだ！！やばいよ！燃やされたらシャレになんない！－）  
「着ます！喜んで着ます！－ずっと、着ておきます！－」

着ます！喜んで着ます！…と着でおもふす！…」

「おお！ そうか、そんなに気に入ってくれたか！ 嬉しいよ！」

「イー、データシマシト…」

「じゃあ、あっちで着替えておいで? じいー!」

「なんでしょう？ 坊ちゃん」

「彼の言葉を理解する力がほしい。」

「かしこまりました。

「どうかな？」  
「似合わないね。」

「うーー涼ー本当の事を言つたじゃないーー、せーせー、やつぱつねー、おーおー、さつまの服が似合つかな?」

（お父さん、フォローになつてないからー）

「やつぱり、着替え直します。」

「あ、さっきの服捨てたよ?」

「え? なんでーーー。」

「君が、ずっと着とくつて言つたから、もうこりなーかなあと迷つて。」

「こや、あれは眞葉のあやでーーー。」

「それこ、あんな汚このにのこには相応しくなーからねー」

「汚くねえよーーー。ちゃんと、毎日洗つてねーーー。」

「もう、いいじゃない済んだ事はーーー。」

「帰りの服は?ーーー。」

「それ着て帰りなよーーー。」

「こそこなもん着て帰つたら、家族やー近所から田こ田で見られるわーーー。」

「つるわこなーーー。ホント君つて細かいね? それとも、一度と家に帰れなことよつこ、してあげよつか?ーーー。」

「足利くんー涼は本気だよーーー。」

「こや、だつたら止めよーーー。あなたの息子だろ?ーーー。」

「ハハツー涼は、私の眞つひととせ聞かないんだよーーー。」

(ガツデムーーー)

「で、どうすんの？着るの？死ぬの？」

「着ます！着て帰ります！…白い目とか気にしません！スイマセンでした！…」

「そ、じゃあ、次行くよ。」

（なんか…すゞく疲れる…）

「また、遊びにおいて！足利くん！…」

「次は、お母様に会わせるよ。」

「…はい」

（もう、別にどうでもいいよ…）

「お母様…会わせたい人がいるんですけど。」

「誰…？珍しいわね、涼ちゃんがお密さん連れて来るなんて？初めてじゃない？」

「俺の友人で足利時宗くんです。こつちが、俺の母でジョニファーだよ。」

「ど、どうも！」

（わあ～すごい綺麗な人！お母さんって、外国人なんだ…！…そういうば、花木くんて髪の色金髪だもんね…）

「…くえ、ずいぶん地味な子ね？涼ちゃんの友達って書つかり、結構綺麗な子なのかなと思つちやつたわ」

「「めんね、母は正直者だから。」

「…もうみたいだね。」

「あ、それより涼ちゃん…聞いたわよーーー。」

「何をだい？」

「アメリカの息子とやつ合つたらしいわねーーー。」

「ああ…望ね。うん。田にモノを見せてやつたよーーー。」

(望?…東端先生の事だよね?やつぱり親戚同士だから何かマズい事でもあつたのかな?!)

「よくやつたわーーー。」

「えつ?」

「あの、ドブスのアメリカの息子、あたし気に入らなかつたのよーなんか、あの女に似て嫌味な子だつたものね。顔だつて、あの女にそつくりでブスだし。」

「望は、母の姉の子なんだよ。姉妹だけじゅくへ仲が悪くてね。」

「へ、へえ…」

「涼ちゃん、姉妹なんてよしてよ！あんな女。姉なんて思つた事ないわ！あたしよりも、ブスなくせしていつつも、偉そうに言うのが気に食わないのよ…。『何が、世界一美しいよ』あたしが世界一だつての…！」

「いや、俺だけね。」

（ナルシストと性格悪さの根源は母親だつたのか…）

「あ、ごめんなさいね。今から、エステの予約してあるから、また今度ゆっくり遊びにいらっしゃいね。」

「はい。」  
(もひ、来たくないけどね)

「それじゃあね。涼ちゃん。」

「お母様、アイシビューローるー？」

「アイツ？ああ…多分中庭じゃないかしら？何でも素敵な殿方を見つけたらじいわよ。その方に中庭の薔薇を渡すとか言ってたから。」

「そ、ありがと。それじゃ、次行くよ。」

「え、あー待つてよー！失礼しましたー！」

バタバタ…

「あんなに、楽しそうな顔してて涼ちゃん初めて見たわ。」

「お兄様…！」

（わあ～すゞく可憐で…）

「私をお探しになつていらしたんでしょう？」

「何で知つてゐるの？」

「さつや、お母様にお会いしましたから。」さうが、お兄様の「友人？」

「ああ、紹介するよ」

「初めまして、足利時宗です。」

「初めまして、こつも兄がお世話をになつてあります。妹の優と申します。」

「花木くん、綺麗な妹さんだね。」

「まあ、綺麗だなんて…ありがとうございます。足利さんも、とても素敵です。」

「いや…そんな

「（ 、 \* 、 ）」

（素敵だなんて、初めて言われたよ…  
なんて、素直な子なんだ…とも、花木くんと兄妹とは思えない  
よ。）

「なんだか、私も好きになりましたわ（ニニニ\*）誰か、お付き合  
いしていらっしゃる方とか、いらっしゃいますか？」

「えーいや、そんなの全然いません…」

「もし、よかつたら…お友達になつていただけませんか？」

「あ、はい…」

（やつた…ついでに俺にも眷が…）

「本当ですか？すく嬉しい…」

「へえ…お前つて地味な奴がタイプなんだ

（グサツ…）

「お兄様！なに？」とおっしゃりますの…時宗さんに、失礼でし  
ょ…！謝つて（、〇、）」

「い、いやホントの事だし…」

「いじえ、全然そんなこといわせません。私には、お兄様より、か  
つによく見えます…」

「優さん……」

一時宗さん

ねえ？俺を無視しないでよ

卷之三

「それより、あんまり  
つてもしらないよ。」  
優を付け上からせなしおかしいよ? どうな

「え？ どういう意味？」

「それ、そんな恰好してると男たよ？」

- 1 -

「またまた！花木くん[冗談ギシ]よ！ひ、見たて女の子じゃん

一触つて確かめてみたら? そしたら、分かるよ」

ホントに?

ボントたよ

「……ホントのホントに？」

「しつこいなあ。」

「私が男つて、知らなかつたのね。てつきりお兄様が最初に教えて  
らっしゃるのかと思ってたわ。」

）”〇”（  
（男つて…

男つてなんだよ…紛らわしい格好しやがつて！チクショー…！俺  
のときめき返せ…！）

「相当ショックみたいだね。」

「でも、大丈夫…！性別なんて、私たちには関係ないわ…！」

「関係あるわ…！男なんて」めんだよ…！俺は、小さくて可愛い女  
の子と付き合いたいんだ…！」

「…なによ女がいいつて…その気にさせといて今更

「いや、だから、それは、知らなかつたからであつて  
「そんなこと関係あるかよ？」

「えつ？」

「てめえ、俺が男だつて聞いた途端手のひら返しやがつて…ナメて  
んのか？！ああ”？！

オカマをナメつと痛い田舎わすぞ？」「うア？…」

「なんか、さつきと全然違う…！…男になつてゐ？…」

「はん、 じんな地味男」 ちから願い下げだよ！ てめえなんか、 キープだよ。キー プ？ 調子にのんなよ？ チビ助！…」

「しかも、 言いたい放題」

「キレたら、 男に戻るんだよ。」

「一度と、 うちの敷居跨ぐんじゃねえーぞ？ 分かったな？… 殺すぞ？」

「ちよー怖えええー！」

「 もう、 その辺で戻りなよ。それ以上の無礼は許さないよ。こんな地味男でも俺の友人だからね。」

「 …」 めんなさいー お兄様ー…」

(す、 いー花木くんの一言で元に戻つた！…)

「 もう、 用も済んだし向いに行つて花でも向でも摘んできなよ。」

「 はー…

それじゃあ、 いきがんよ。足利さん

( \* ^ ^ \* ) 「

「 も、 もういなら…」 ( 田が笑つてなかつた)

「じゃあ、家族の紹介終わったから、君ももう帰つていこよ。」

「は？」

「だから、もう君には用がないから帰つていこよ。」

（なんだよーーそれーー？）

「俺、今からエステに行かなきゃいけないし。じゃ、車出せらるから、それに乗つて帰んなよ。じゃあね。」

「じゃあね、って……」（ホント面白）「だな（へへ）ってか、結局何しに来たのか分かんないよーー。」

「足利様、どうぞ乗り下せー。」

「あ、はー。」

「坊ちゃんの、無礼私から謝ります。スマセン。」

「そんなー執事さんが謝る事ないですからーー。」

「何分あの性格のせいで、今まで友達が出来た事なかつたので、嬉しかつたんでしょ。」

「え？」

「足利様といふ素晴らしい御友達を、旦那様方に、ただ純粋に紹介したかっただけなんだと思ひます。けれど、接し方が分からずある態度を取られてしまつて……」

「そり…なんですか」

「これからも、坊ちゃんをよろしくお願ひします。」

「はい。」

執事さんの話を聞いている内に、せつせつとまで怒っていた自分が、バカらしくなつてきた。

花木くんは、花木くんなりに一生懸命、俺に接しているのかもしない…

今まで一人だつたからどうしていいか分からずに、ただ、思うままに行動しているんだろう。…まあ、いいか！かなり変わった友人だけ…

だけど、素直に嬉しかったから。花木くんの気持ちが。腹を立てる事ばかりだけど、寛大な心で接して行くよ。

「足利様、『自宅に着きました。』

「あ、ありがとうございました。」

「いいえ、こちらこそ。あんなに楽しそうなお顔をしてる、坊ちゃんを見るのは初めてでした。また、いらして下さいね。」

「はい。」

「それでは。」

（いい人だつたな…執事さん。あんなに大事に思つてくれる人がいて羨ましいよ。）

ヒソヒソ…

「ん？」

「いやだ…見て、あの格好！」

「何あれ？なんであんな格好してんの？」

「足利さんとの子でしょ？」

（はつ（――）

ヤバい忘れてた！！

俺、貴族の格好のまんまだつたんだ！！）

ゴソゴソ…

（は、恥ずかしい！！穴があつたら入りたい！！）

「時宗…」

「母さん…！」

「あんた…何なのその格好？！つてか、どこ行つてたの？！…頭大丈

夫？！」

「こや…」れは、事情があつて…」

「とにかく、中入つてよー。」近所に由て田で見りやしない！…！」

「…はー」

ガチャン…

「で？なにがどつた？、その格好に辿り着くの？」

「友達の家に遊びに行つて来たんだよ。」の服は、友達のお父さん  
がくれた。」

「へえ…わうーって、そんな言い訳が通ると思つてんの…ホント  
の事言こなさい…！」

「ホントだつて…！」

「いー？時宗。」れは、日本よー。」れは、中世のラーーロッパじゃな  
いのー分かる？」

「分かるけど、ホントの事なんだから、仕方ないじゃん…！」

「やう…もう、いいわ。母さん怒つた。あんた、今日、飯抜き…！  
母さんに恥かかせた罰…！」

「そんなん（泣）」

なんで、いつもこんな田たばかり合ひのじょうか?  
俺が、いつたい何をしたと言つのですか??

スマセん、執事さん。やっぱり、普通の友達がいいです。変わつた友達なんていつません。

誰か、俺に普通の友達下さい。

誰か、俺に救いの手をさしだして下さー。

そして、平和なところへ連れてつて下さー。

そう、思ひ今日の頃。

おまけ

「ああー!今日は楽しかったなー!やっぱり、彼を連れてきて正解だつた 最高の罰漬しだつたなー!ー今度は、何して遊ぼうかな?」

執事が考へているのとは裏腹に、足利の事など、これっぽっちも考えていない、花木くんなのでした。

終わり

### 第3話・花木家の一族（後書き）

毎度ありがとうございます。

いかがでしたか？

花木家の一族。

タイトルは、お気付きの方がいらっしゃるかな？犬神家の一族から  
拝借しました（笑）

つてか、『こんな家族ありえねえーよ』をテーマに書いてみました。

次は、間宮くんのバイト編！強敵キャラ表れる！！の巻で行きます  
ので！

それでは、また（・・・）

## 第4話・閨窓くさのバイト（前編）

番外編小説の第四弾です  
強敵キヤリとは、一体誰なんでしょうつか？！  
それでは、お楽しみ下さご。

## 第4話・間宮くんのバイト

「ここにちは、僕の名前は富樫優一と言います。スマイルコンビニで働く、大学生です。

ここで働き始めて3年になります。

店長からも絶大な信頼を受けていて、もし、就職が決まらなかつたら、社員にしてやると言われました。

正直、就職が決まりそうになかつたので、その言葉を聞いて安心しました。

さて、今日も頑張るぞ！！

あ、そうそう！今日は新人さんが来るそうです。新人といっても、前のバイトもコンビニだったらしいので、一から教えなくていいので、助かります。

僕、教えるの下手だからなあ…

どんな人が来るのかな？もう約束の時間なんだけどな？。  
何か、あつたのかな？！  
もしかして…事故に？！  
わあ！どうしよう

今ごろ救急車の中だよヘルプミーって叫んでるよ…。

富樫くんは、妄想癖があります

「おーー！」

「えやあー！」

「てめえ、俺が何回呼んだと黙つてんだ？殺すぞ？」

「く…殺す？もしかして、殺し屋ですか？！」

.....

「…てめえ以外に誰かいないのか」

「あ、すいません（^\_\_^;）今の時間帯は、すぐ暇なんで僕だけです。後から店長が来ると思います。」

「チッ…俺がわざわざ出向いてやつたのに、何してやがんだ？あのハゲが！」

「あの…失礼ですけど、あなたは？」

「今日から、ここに勤めてやる、間宮だ。」

「あー新人さんですか！初めてまして、富樫優一と聞こえます。よろしくお願ひします。」

「ああ。」

「間宮さん、殺し屋じゃなかつたんですね…よかつた…実は言つと内心ドキドキだったんですよ（ ）（ ）」

「.....」

「どうしたんですか？」

「なんでもねえ」

「あ、ちょっと待つて下さいね！今、制服持つて来ますー。」

バタバタ…

「変な野郎だな？」

間宮くんか…めちゃくちゃ、かつこいい人だったな  
ってか、最近の高校生はみんな、オシャレだよな  
僕も見習わなきや！

「あ、あつた！サイズは、Mで大丈夫かな？」

結構、身長高かつたしな

『わあ！助けて～』

ん？なに！誰かが、叫んだよ…今…！  
…もしかして、間宮くん…！…「ンンン…強盗？！  
た、大変だあ！どうしよつ！  
そうだ、まず様子を見に行かなきや！  
ゆっくり、忍び足で…そつと…

「ああ”？てめえ、今は、ポテト売り切れつつつてんだろ？が？殺  
すぞ？」

「ヒィーーー！」めんなさいーーー！」

「ま、間宮くん、何してるの？ーーー！」

「！」こつが、ポテトポテトつてうるわこから注意してたんだ

「だ、だめだよ！君は店員ーーこの人は、お客様ーーもつと、優しく注意しかないと！」

（いや、客に注意とかないからー優しく注意とかありえないからーー）  
と密は心の中で叫んだ。

富樫くんは天然です

「うつせえー俺に描図すんな！俺は俺のやり方があんだーー殺すぞ  
？」

「もうーーさつきから、『殺すぞ？』って、何回も言つて！それ口癖  
なの？！だめだよー直さなきゃーそんなんじや、ろくな大人に…」  
はつ！（・口・ノ）ノもしかして…間宮くんは、すさんだ家庭環境  
で育つたのかも…だから、平気でみんな言葉が…きっと、お母さん  
の連れて來た男の人に苛められた過去を持つてるんだね…間宮く  
ん、『ごめんね！何も知らないで、怒つたりして！

富樫くんは妄想癖があります

あれから、間宮くんにチョーク・スリーパーをかけられて、失神し

しかけたポテトのお客様に、謝つてなんとか事なき終えました。

彼は、新人だし、家庭環境がすさんだから（勝手に決め付けています）僕が、力になつてあげなきやね！

カラカラ～

「いらっしゃいませ～」

「やあ　間宮、来てあげたよ…つていな～じやない？」

わあ…すごい（ - - \* ）

王子様だ！初めて見たよ

花木くんは、王子様のかっこをしています

「ねえ？君！」

「は、はい～」

「ここに聞宮つて男バイトしてない？」

ま、聞宮くん王子様と知り合になんだーーす”ーーー

「ちょっと、聞いてんの？」

「あ、すいませんー王子様！聞宮くんなら奥で休憩しますー今、呼んでくるんで、お待ちトドセー」

バタバタ

「…王子様だつて…？ちょっと、嬉しいじゃない

「間宮くん！王子様が…つて何してるの…？それ、店のおでんじやない！」

「ああ”～？腹減つてるから食べたんだよ？文句あんのかよ？」

「文句も何も…」

はつ（・口・ノ）ノ

そうか…間宮くん家で、お母さんがご飯をしてくれないから、ご飯が食べれないんだね…だから、コンビニで働いて、ご飯を調達してるんだ！

なんて、賢いんだ！

「コンビニでそんなことを、してはいけません

「間宮くん！これも食べなよ！今日入つてきたお弁当だから、大丈夫だよ！」

「おー、気が利くなーー！今日から、お前も俺のパシリにしてやるよー！なんか（喧嘩とか抗争）あつたら、いつでもぶつ飛ばしてやるよー。」

「ありがとう？」

パシリ？…パシリってなんだろ？友達の新しい呼び名かなんかかな？間宮くんつていい人だな…『なにがあつたら』なんて、家の事で大変なのに…

ほんとは、年上の僕がしつかりしなきゃいけないの……！

間宮 side

かつたりいな……

なんで、俺様が、便所そりじなんか、しなくちゃいけねえんだよ？  
殺すぞ……！

つてか、なんだあのちび助は？  
コンビニって、中坊もやつてんだな。  
なんか、不思議キヤラでやつにくいぜー……  
( 。。 )

富樫くんは、童顔で15歳の男なので、間宮くんは、中学生と勘  
違いしてこます

しかも、ちょっと上から目線つてのが気に食わねえな……絞めとくか？

「間宮くんー！王子様が……つて何してるのー？それ、店のおじさんじゃ  
ない！」

「ああ……？腹減つてるから食べただよ？文句あんのかよ？」「

「文句も何も……」

チツ……うざえな。やつぱり絞めるの決定だなー。  
誰が上かつてのを、たつぱり教えてやるぜー！

「間宮くん！これも食べなよ！今日入ってきたお弁当だから、大丈夫だよ！」

なんだ？俺様の睨みにびびって弁当まで差し出してきやがったな。口ほどにもないな。絞めるほどでもないし、むしろパシリに出来もうだな。

「お！気が利くな！！今日から、お前も俺のパシリにしてやるよ！…なんか（喧嘩とか抗争）あつたら、いつでもぶつ飛ばしてやるよ！…

「ありがとっ？」

パシリ2人目ゲット…！これから、うんと、こき使つてやるぜ…

間宮くんは悪魔の子です

「ちょっと…こつまで待たすのさ…！」の俺を待たすなんて、いい度胸してるね…！」

「王子様…！」めんなさい…間宮くん、王子様が、間宮くんを訪ねて来てくれたんだよ！」

「花木、てめえ何しに来たんだよ？ってか、なんちゅーかつ…してんだ？俺の前では、私服禁止つつただろうが？」

「つむさいな！仕方ないだろ！Hステの帰りだつたんだから。それにしても、わざわざ、この俺が寄つてあげたのに、なんだい？その態度？」

「ああ…？文句あんのかよ？」

た、大変だあ！

間宮くんと王子様が……喧嘩してゐる…止めなきや…王子様に逆らつたら、間宮くん死刑になつむやつよ……なんとか、阻止しないと…

富樫くんの中では、花木へ自分へ間宮の構図になつていてます。ぞまあみるー間宮ーへ三へ

「あの～ちょっとこーい？」

「「あ”？」「

「店鋪…」

「お姉さん、あいつ待つてるんだがどう？」

「あー…」

「それがどうした？ハゲ…てめえがレジしたら済む話だらつが？」

「ええ……店長に向ひつひやつてんの？君よつとんだけいんだけよ？…君くなこよ？…店潰すよ？」

「な、なこいのむかー…」ハゲーと一切関係ないのに、なんでこじま

「な、なこいのむかー…」ハゲーと一切関係ないのに、なんでこじま

「だったら、おとなしくしておへ」とだね。」

「だったら、おとなしくしておへ」とだね。」

「命が欲しかつたらな」

「ちゅー物騒じゅんー」コンペー強盗よつ、怖こよ..」

「で、店長ーそんなことよつ、早くレジしないことーお客様がー..」

「あーそだー早く行こつー富樫へさ、間宮へさ..はこよ、休憩  
して下さこ」

「当たり前だ!ハゲ

「せひ、わざと働きなよ」

「なんか、間違つてゐる..世の中、間違つてゐよ..」

あれから、店長と僕で接客をこなして、なんとか混乱は避ける事が出来ました。

最初、文句を言つていたお客様も、間宮へさと王子様が出て来たら、何も言わなくなりました。  
…なんだろ?

まあ、いろいろと大変でしたが、けつこつ楽しい一日になりました。  
間宮くんとも仲良くなれたり、王子様にも会えたり。  
これから、スマイルコンビニに来るのが楽しみになります。

あ、そういうえば、店長が泣いていました。

間宮くんが入ってくれて、そんなに嬉しかったのかな？よかつた…みんな、仲良くなれて。

富樫くんは天然です

これからも、こんな感じで和氣あいあいと働いて行きたいと思います。  
終わり。

おまけ

の担当をしていた、足利くんから、一言。

「この話の登場人物、みんなまともじゃないよね」

今度こそ、終わり

## 第4話・間宮くんのバイト（後書き）

いつも、ありがとうございます。

いかがでしたか？初登場の天然妄想大学生の富樫優一くんは？  
実は、強敵キャラとは、彼の事でした。

ある意味強敵じゃないですか？！

話、噛み合ってないし（笑）

まあ、次の作品は未定ですが、本編共々こちらも、よろしくお願ひ  
します（――\*）――\*）

第5話・一 条くんと卒業式（前書き）

3円といつ」と、卒業をテーマに書いてみました。  
一条くんとは、青風高校生徒会の会長の事です  
まあ、読んで見て下さい（ 、 、 ）

それでは、どうぞ

私の名前は、一条帝。じゅういち、青風高校の生徒会会長だ。

私は、今田の娘を田口にいを卒業する。

— それでは、卒業生答辭！卒業生代表 一糸帝！

「はい！」

今思えば、ここでの生活も悪くなかった。良き仲間に出会えて、楽しい思い出を作れて、尚且つ、生徒会会長といつ立派な職務にもつけたからだ。

しかし

一つだけ心残りがある！それは、世界一の問題児、間宮健児に勝てなかつた事だ。

球技大会で、あの男に惨敗してからと言うもの、ますます態度がデカくなりやがつて…

おつと、すまない。言葉が汚くなってしまった。  
とにかく、あの男だけは許せないと呟き事だ！

まあ、卒業する今となつてはもう、どうでもいいんだな。

「……」これを答辞とする！卒業生代表、一条帝。

今日の、IJの良き口にあの悪魔の事など考えたくもない。

も、卒業したら奴の事を考えなくて済むから、せこせこする。  
も、服装を注意してD.D.Tをくらひつ事もなくなる。

「卒業生退場……」

もう、あの馬鹿の事で頭を抱える事もなくなるの……。  
それが、妙にさみしいと感じるのは、私の生活の一部に、一つの間に  
か、あの馬鹿がなつていていたといふことか……

「馬鹿々しい……」

「ん? びしつた」

「いや、何も」

本当に、これで終わりなのだな。

「お疲れ様でした。 一条会長」

「会長は、よしてくれ。もう、私は、会長じゃない。今は、君が会  
長だろ? 五木」

「やうでしたね」

「なんで、五木なんだよー。俺の方が、会長っぽいすよね?」

「やう怒るなよ? 四十嵐会長」

「実力の差でしょ！」

「ムカつくー！ホントにムカつくな？お前は」

「一条先輩は、大学に行くんですね？」

「ああ……」

「無視すんな！クソ五木」

「三上先輩と一緒に大学ですか？」

「あいつは、大学行くの止めたよ。」

「何ですか？」

「アメリカに行くそうだ。役者になりたいらしい」

「へえー、でも先輩ならなれるつすよー！かつこーこーし

「一葉先輩は？」

「あいつは

「俺は、ボクシングのプロ選手になる」

「一葉先輩！」

「俺も、いるよ」

「三上先輩！」

「なれるんすか～？プロなんて、そりゃくはなにつすよ？」

「ううせえ～プロレス馬鹿！てめえは、黙つてうー。」

「なんなんすか～ボクシング馬鹿ーー！」

「あ～～？」

「やめうーー！人とも。今日ぐらこ仲良く出来ないのか？」

「まつとけばいいんですよ。馬鹿マコンビせ

「だから、Mじやねえつてーー。」

「仲がいいんだか、悪いんだか」

「ホントに可愛げがないよな？五木は」

「同感つす」

「僕にそんなもん、求めないで下れー。気持ち悪い」

「「ムカつくーー。」

「フツ……」

「どうしました? 三上先輩」

「いや、 もうしんなるなと思つてな… もへ、 15人揃つ事も  
なこと思つとな」

「…みんな、 バラバラになっちゃいますもんね」

「一條も俺も県外だし、 ましてや、 三上はアメリカだもん…」

「今日で、 別れか…」

「なに、 みつともない顔してるんですか? 大の男が4人も揃つて。  
…自分の夢の為に行くんでしょ? が? だつたら、 もつと胸張つて下  
さい。 それでも、 青嵐高校生徒会ですか?」

「五木…」

「そうだな。 胸張つて卒業しなきやな」

「会えなくたつて、 心はいつも、 繋がつてこるつすよーなあ五木ー」

「そんな、 気持ち悪い事は言つてしません

「なんだよー雰囲気ぶち壊しじゃねえか!」

「知りません、 そんなこと」

「やっぱ、 ムカつくわーお前と聞富だけはー。」

「…」「葉」

「…ホントは分かってた。あいつより、弱いって。けど、認めなく  
なかつただけなんだ。プロレスみたいなのに、ボクシングが当るつ  
てのを…」

「だから、俺はボクシング選手になつて、世界チャンピオンになる  
！そして、あいつに分からせてやるんだ！ボクシングの偉大さをな  
！」

「頑張れよ」

「ああー。」

「一 条先輩は、弁護士になるんすよね」

「やうなのか？」

「ああ、父と同じ道を歩みたいと思つてな」

「お前じゃ、頑張れよー弁護士つて、難しいんだろ？」

「先輩が、世界チャンピオンになるより簡単つですよ」

「んだと、「アラア？」

「三上先輩も、頑張つてやれー」

「お前もな、五木」

「い、だあい！——葉先輩、ギブ！」

「いひー、やめんか！お前たちー。」

「それじゃあ、最後に[写]真でも撮りますか」

「照れくさいな」

「いいじゃないですか？先輩たちが、此処にいたっていつ<sup>か</sup>に<sup>か</sup>に……」

「よし、撮るか！」

「それじゃあ、いくつすよー！」

パシヤ

「……じゃあ、帰るか」

「ああ……」

「じゃあな、五木！バカ四郎ー。」

「今まで、本当にお世話になりました。立派な先輩方の教えを基に、これから生徒会を頑張っていきます！——ありがとうございます！」

「

「お前たち……」

「へへッ、五木といれだけは、ちゃんとおつなつて決めてたんす  
よー。」

「なんかお礼とかないんですか?、僕、すいへん恥ずかしかったんだ  
から」

「「「ありがと」」

いつも、生意氣だった後輩が、こんなに立派になつているなんて……

「それじゃあ、体に氣をつけ。」

「また、こつでも遊びに来て下さー。」

人といつのは、成長するモノなのだな……

「一人とも、ちよつと待つてよーー!」

「早くしろー・パシリー!」

「ホントに禮は、とるこね?」

「なんだよーお前らがこんなに、荷物持たせるからだろ?ー。」

…変わらぬ奴もいるナビな

「聞聞、お前と並ひ奴は相送わらうか…」

「ん?なんだ、クソ余處じやねえか?」

「よー花木」

「何してゐる君たち?」

「何つて、今日は卒業式だつただろ?が?」

「「それが?」」

「ちよつとー先輩たちが、今日卒業したんだよ」

「へえーおめでと」

「ケツーどうでもいいわ、てめえらの事なんて」

「確かにな~」

「ちよつと、先輩たちに失礼だらーーー!」

「おい、行げーー早くしないと、ランボー特製Tシャツが売り切れ

るー!」

「そんなの買つのは嫌、べらいだよ。それより、俺の服が先だよー!」

「てめえの服なんざでめえで買ひに行け!」

「お前も、自分で買いに行け！！」

「…なんか、俺たち眼中にならしくな

「ど」までも、「ケにしやがってークソ聞富ー」

「やめろーーー葉…もう、奴と関わらなくて済むんだ。帰るぞ」

「じゃあな、花木ーまた、勝負してくれよな」

「気が向いたらね」

「じゃあなークソ聞富ー世界チャンピオンになつて、てめえを見返  
してやるぜ」

「ふん、てめえが世界チャンピオンになれるんだつたら、地球上の  
生物みんな世界チャンピオンだな。」

「￥(\*・・)ーあんだとー。」

「では、失礼する」

「あ、はーー卒業おめでとうございました」

「…ありがと」

「おい、三上ー聞いたかよ？今の言葉ーマジムカツくー。」

「落ち着けよ」

「じゃあ、Jリーグでお別れだな

「ああ」

「アメリカで寂しくなつたし、電話してこよ

「あつがとう、お前らもな

「……やれじやあ」

この先の事を思つと、私でも、正直不安だらけとなる...

だけビ...

「まだ、何か用か?」

「別に……ただ、一晩泊つてこいやつと黙つてな

「?」

「心配すんな、青嵐は俺が守つてやるよ（俺んだしな）  
だから、てめえは、てめえのやつたい事をやつやいいんだよ。（死ね）」

「……聞聞

「じゃあなークソ会議」

「…じゃあな、クソ間宮…」

前言撤回。

人というのは、成長するモノだな。  
こんなに、立派な後輩たちがいるんだ… 今度は、私が成長する番だ  
な。

私は、私の夢のために頑張つてみよう。

生意気な後輩たちに笑われないよつ。

私の名前は、一条帝。

私は、今日の喪を口上、JUJを卒業する。

## 第5話・一條くんと卒業式（後書き）

いかがでしたか？

ちょっと、間宮くんがいい人に見えたという、そこあなた！

それは、勘違いです！間宮は、そんな出来た人間じゃありません。てゆーか、人間じゃありません。悪魔です！

実は、青嵐を乗つ取る為に、会長を安心させるために、あんな口ハ丁を…という、裏エピソードがあつたんです（笑）すいません、伝わりにくくて…

何はともあれ、今度は、春休みの出来ごとでも書けたらいいなと思つてます！

それでは、また（ ）、（ ）

## 第6話・優ひやとと運命の出会い（前編）

久々の番外編更新！！

今回のお話は、花木くんの妹…じゃなかつた、弟のお話です。

運命の出会い…さて、それは誰でしょうか?…

それでは、スタート…！

## 第6話・優ちゅうさんと運命の出会い

私の名前は花木優。

今年から、浦沢高校に通い始めたピカピカの1年生。

兄は、世界1のナルシストで有名な花木涼。

浦沢高校に通っていたのですが、気紛れで、あの凶暴で下品な高校、  
青嵐男子高校に転校いたしましたの。

お兄様以上の美貌を武器に、落とした男は数知れず…  
でも、なぜかしら？

いつも後、一步のところでもまくいかないの…

（ それは、あなたが男だからだよ。 ）

とにかく、今日こそこそ、素敵な殿方をGETするわーー！

待つてね

未来の旦那様！！

「 おい！見てみろよ！あれって浦沢の制服じゃねえ？」

「 マジで？ってか、ちょー可愛いんだけど？あの子ー！」

フフッ…私のタイプじゃないけど、そう言わると、嬉しいわね。

「 ねえねえ、彼女？一人？」

( 女の子と勘違いしています )

「俺たちと遊ばない?」

「( めんなさい ) 私急いでますの」

「いいじゃん? 遊ぼうよ?」

「放して下せ」…

「ちょっと、しつこいわね? ! タイプでもないのに、人の体にベタベタ触りやがつて… いっちょ、締めてやるか? 」

( 我を忘れて、男の子に戻っています )

「ちょっと、てめえらしつけえんだよ? いいかげんに

「おい? てめえら、何やつてんだ? 」

えつ…?

「男一人が、女一人に寄つてたかつて何やつてやがる? 」

「格好いい!! 何て素敵な殿方なの? !  
ストライクゾーンビ真ん中だわ!!

「なんだてめえは? 」

「お、おこーあこつもしかして…?」

「俺が誰だつて?教えてやるよ、世界最強の男ー間宮健児様だよー。」

「マリヤケンジ…名前も素敵…

「おこーせーべーよー!こつすうだえ強こりしこせー。」

「まつーんなのまつたりだよー間宮の名を語つてみだつて…!「ばかーちばーよー確かに本人だつてー見てみりよーあの制服、あれ、青嵐のだぜ?」

青嵐?お兄様の学校だわ…

「マジで?」

「マジで…!」

「じゅあ、ピンチ?」

「かなづピンチ…!」

「おーーー話は終わつたか?」

「「すこませんでしたー間宮様とは、つゆ知りや、」」無礼お許し下  
れーーー。」

「」

「」

「今、ムシャクシャしてるんだ。黙つて殴らせろ！！」

ええ――！」

「死んで訴え！」

オーッ！！

ノギッ!!

卷之三

何で、ワイルドな方なの… 素敵。  
この方こそ、私の探し求めていた殿方だわ！！

「あ～すつきりした

「あ、あの…」

「ん？ あんだよ？」

「助けてくれてありがとうございました！」

別に？

「あ、あのお礼を！お礼をさせて下さ……！」

ボディタッチ&amp;涙田&amp;上田使い……。  
これで、落ちない男はいないわ……！」

「急いでるからいい。触んな

な、私の攻撃が何一つ通用しない？！

「じゃあな！」

「あ、待って！私の殿方！……！」

ピュー……

フフフッ……面白い。

この私を見て落ちなかつた男は、初めてだわ……

青嵐高校、マミヤケンジ

見てらっしゃい！必ず振り向かせて見せるわ……

逃がさないわよ！オカマは、女以上に、諦めが悪いからね……！」

絶対、旦那様にしてみせるんだから……！」

ブルッ！

「どうしたんだい？」

「いや、寒気が…」

「へえ…珍しい。馬鹿は風邪引かないって言ひのこ。」

「あんだと?…」

「つて、地味男君が言つてたよ」

「言つてないからーてめえ、ナルシストー何言つてんだ…!」

「殺す…!..」

「言つてないつてーちよつ…間宮様?…」

「死ね…!..」

「あああああ…!..」

終わりー

「つて、終われるか!なんだ、この終わり方…!..」

## 第6話・優ちやんと運命の出会い（後編）

こつも、あつがといわざるこまく。

いかがでしたか？

花木くんの弟、優ちゃん。

まさか、悪魔に惚れてしまつとは……

この続おせ、本編で書きたこと思つので、樂しみにしておいてこね

それでは、また（ 、 、 ）

## 第7話・季春くんの一日（前書き）

いんばんは

約半年ぶりの番外編更新です

今回の主役は、ドリ様こと岬季春くんのお話になつております。

もちろん、なつちゃんも登場しますんで読んでやってください。

それでは、すたーと

## 第7話・季春くんの1日

今日は、龍神高校に通うがっこうのひ、通称ドリ様で日々、親友（？）を虐め続けている岬季春くんの1日を覗いてみよう。

『グッデモーニング・季春……。』

「グッドモーニング、サリー。今日も美しい声だ。」

『 もう、季春つたら……愛してゐわ』

「俺も愛してゐよ」

季春くんの朝は、只今お付き合いで中の金髪美女サリーとのモーニングコールから始まる。それが終われば、シャワーを浴び、優雅に食事を取る。

例えそれが遅刻、ギリギリの時間帯でも気にする事はない。

ピンポーン！

おや？誰かが来たみたいだ…しかし、季春くんは自分の時間を邪魔されたくないの、一向に出る気配はない。

ピンポーン！  
ピンポーン！  
ピンポーン！

しかし、そんな季春くんの行動を予測していたのだろうか…？相手も負けじとチャイムを鳴らす。

「『アラア…季春…居てるのは分かってんねんぞ……やつをと開けろ…。』

チャイムを仕切りに鳴らした相手は、季春くんの相棒：「相棒ちやうわ…！ 気色悪い！」ではない、ただのクラスメートの青葉夏輝くんでした。

「…何だよ？ 気持ち悪い… 何で朝からお前が俺ん家に来てるんだ…？ 近所迷惑だろ？ が？ 警察呼ぶからな。」

「アホか…！ 俺かて来たくて来とんとちやうわ…！ お前が、昨日の帰りに『明日の朝7時に俺の家に集合。遅れたらお前の恥ずかしい秘密を優ちゃんに暴露する』って言つたんやないか…。」

「…………ああ…。」

「まさか、忘れてたんとちやうやうやうな…？」

「悪い、忘れてた。」

「はああ…？ マジでムカつくんですけど…！ 朝苦手な俺がつ… ただでさえ最近寒くて中々起きれんくなってるこの俺がつ… 朝早く起きて全く学校と逆方向のお前の家に来てやつたのに…！ 忘れてたて

…まあ、まあええわ…なつちゃんは心優しいからな…それよか、なんの用事やねん…! じょうもない用事やつたらシバキ回すからな…!…」

(…何の用事だつたんだ?)

季春くんは、これと言つた用はなく、ただ単に夏輝くんをからかつたみたいですね。

まあ、こんな事は今に始まつた訳ではなく月に2・3回のペースであります。

「ハツ…まさか、用事つちゅーのも嘘か! ? また、俺を騙したんか! ?」

毎回、同じ手に引っかかる夏輝くん。

季春くん曰わく夏輝くんのオツムは、プチトマトぐらいの大きさしかないのに、いつも面白いぐらうに引っかかってしまうのです。

「もつと大きいわ! ? シバくぞ! !」

「と言つわけだから、別に用もないし帰れ。朝からお前の顔を見るのは不愉快だ。」

「言われんでも帰るわ、ボケツ! ! お前なんか…」  
ポンポン!

「君、ちよつといいかな?」

夏輝くんが季春くんに負け犬の捨て台詞を吐いつとしたら、後ろから見知らぬおじさんに呼び止められました。

「なあ、誰やねんー。おつかせやん?」

「け、警察！？何の用やねん！—」

「通報があつてね……君がいきなり押しかけてドア越しから大声をあげて困つてるってね」

「季春っ！」「アリト……お  
「那人連れて行つて下さい……俺、怖くて学校にも行けません！  
！」

季春くんは迫真の演技でお巡さんへ訴えました。

その結果…

「ああ～は～は～！……言～訳は、署で聞くから。」

「うあああああん（泣）」

夏輝くんは、お巡りさん連れで行かれました。

「さて、朝一の夏輝イジメも終わったし学校に行く用意でもするか。

」

そう、彼は最初からこうなるように仕向けていたのです。流石は、ドジ様ですね。

夏輝くんは、警察署で3時間程しほられたそうです。

「あ、あたし……と付きましたよ……」

「何?」

「岬先輩……」

理由は言えませんが、先生にも色々とあると聞ひました。

そんなだらけた季春くんの態度に担任の先生は、文句一つも言いません。

季春くんが学校に着くのは、いつもお直前です。  
所変わつて龍神高校。

季春くんは、夏輝くんと違つて女の子にモテます。かなりモテます。

「悪いけど…俺、年下に興味ないから。」

季春くんは、女性のタイプは、年上の女性です。

「季春つーーー！」

カツ「良く季春くんが去ろうとしていたら、何処からともなく夏輝くんがあらわれました。

「夏輝…遅かつたな。何してたんだ？」

「お前がソレを言つんか！？ つーか、もうそれほどでもええわ！…思い出しただけで腸が煮えくり返りそうになるからな……それよりもや…、」

「なんだよ？」

「何や今の断り方は！？ 一生懸命告白したこの子に失礼やうが…？」

「本当の事を言つたまでだ。何が悪い？」

「かあーーーこれやから、クール ボーイはーーー」

「…？」

「ええか、よく聞けよ? 巷では、やれシンデレラ、やれ俺様が人気や言うけどな、いつの時代も男たるもの、女子には常に優しくじえんとるめんにいかないかんねん。」

「あやこちゃんを平仮名で発音してこる時点でお前に紳士を語る資格はない」

「五郎蠅いわ!! 細かい事言うな!!」

「つまり、お前は何が言いたいんだ?」

「せやから、この子にもつけっと優しくへ…

「素敵!!!!」… そう素敵い!!?」

「やつぱり岬先輩は、素敵です!! 益々好きになりました!!」

「え!!? なつ、何で? 何処が? 何処に好きになる要素がありまして!!?」

「何処って、もちろんクールな所です!!」

「てか、青葉先輩、今時”じえんとるめん”は無いですよ。青葉先輩が言つたらお笑いにしか聞こえませんし(笑)」

「なつ、お、お笑いやで!!?」

「なんか、気持ち悪いですよ(笑)?… あつと、いけない友達待たしてたんだつた!! そ、それじゃあ岬先輩!!」

「あ、あ、気持ち悪い……つて……」

「ドンマイ（笑）」

「し、シバぐーーーお前を今からシバ  
季春くーんーーー今日もカツコイイーーー」

「あたしと付き合って！！」

「何言つてんの…？あたしょ…」

「悪いけど、ガキは嫌いだから。」

『さやあ…カツコイイ』

「……世の中、完全に間違つてゐる……」

そう呟いた夏輝くんの口には光モノがありました。

夕方、学校も終わり校門には季春くん待ちの女の子で溢れていましだが、手慣れた感じの季春くんは、その群れを押しのけて颯爽と去つていきます。

いつも（不本意で）一緒に夏輝くんの姿がありません。

夏輝くんは、さつき気持ち悪いと言われてショックで早退してしまいました。

そんな夏輝くんの事を季春くんが心配して…

（夏輝がいないと、イジメる奴が居ないからつまんねえーな。）

いる訳もなく、そんな事を考えながら帰宅していました。

『よつ…久しぶりだな』

どこからか見知らぬ高校生があらわれました。

「誰だ？」

『誰…？ 酷いね～覚えてないの？俺、この前、駅前でお前にボロボロにされたんですけど～』

「知らねえよ。ボロした相手いちいち覚えてないし。」

『言つてくれるね～おいーー。』

「どうやら、喧嘩で季春くんに負けた子のようです。」

合図と共に、10人ぐらこの男の子達が季春くんを囲みました。

「はあ…」

「ううう～このやつは、みんなお前に恨みがある奴だ。今から俺たちがお前をボロボロにする」

「その素敵な計画、俺も仲間に入れてくれや」

夏輝くんの登場です。

『ひー。』

「来るの遅いんだよ……バカ」

「それがせつかく来てやった俺に重い叫葉かー…?」

「ああ～はいはい～アリガトウ～ザイマス～」

「心が籠もつてへん…!」

「ううう…」

「なんやどー?」

『…おい、何俺らの事シカトしてんだー?』

『ぶつ殺すぞー!ああ、?』

「チツ…季春、お前の事は後やー!仕方ないから、先にこいつひづけるから待つとけ!」

季春くんの喧嘩なのに、いつの間にか夏輝くんが相手をやるよつてなつました。これも季春くんの策略です。

「よろしく～」

『ふん!偉そうこーーおー、やつはまえー!』

「今日の俺は不機嫌MAXやから手加減でけんでー!」



「自分ら、手応えのやなーもひとつ頑張れやー！」

流石は、龍神のZ.O.B.I.。あつとこう間に喧嘩は終わってしまって、した。

「「」苦勞様、もつ帰つてこいや

「いいことあるかー？」

何処までも自分勝手な季春くんです。絶対にスタイルは変えません。

「そこになあれーーお前は、ほんまに……」

( カバーの奴今頃何しているかな… )

「 パソコンを んと聞いてんのかー…? 」

「 ああ ? 聞いてねえよ 」

「 聞け…… 」

「夏輝……」

「な、なんやー…?」

「俺、帰つてサリーに電話しなきやいけねえから、もつ歸るか?」

「えつー…ひょつ、季春くんー?」

「じやあな。お前も早く帰れよ」

「サリーって誰せなん…！」

いかがでしたか？龍神高校のどう様こと岬季春くんの1日は？

彼の1日は、夏輝イジメに始まり、夏輝イジメで終わるのです。

でもそれは、裏を返せば彼なりの愛情の表現なのでしょう。

彼が夏輝くんを認めているといつ。

今日、1日お付き合いいただきありがとうございました。  
またの機会にお会いしましょう。

それでは

「そんな歪んだ愛情いるか？！――」

おわり

## 第7話・季春くんの1日（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございました

いかがでしたか？

夏輝イジメのお話は？

何気に季春くんの彼女も出てましたね。

金髪美人のサリー。

もちろん異国の方です。

季春くんが、付き合う人は大体異国の方です（笑）

そんなプチ情報入らないって？

本編の文化祭編を終わらせてから番外編と考えてたんですが、番外編の方が早く出来てしまつたので先に載せちゃいました  
本編もなんとか頑張つて更新したいと思います

それでは、皆さんさよなら、

## 第8話・エイプリルフールの夏輝くん（前書き）

いつも、久しぶりの更新です。170日も更新してなかつたんですね～

さて、今回の番外編は、そのまんまエイプリルフールのお話です。

凄くクダラナイ話しありますが、皆様読んでやって下さいませ。

それでは、スタート

## 第8話・エイプリルフールの夏輝くん

今日は、4月1日のエイプリルフール。一年に一度だけ、どんな嘘をついても許される日。しかし、如何なる理由があろうと嘘はいけない。よかれと思ってついた嘘が、時に誰かを傷つける事だってある。

このお話は、そんな思い掛けない嘘で、一人の哀れな少年が、病院送りにされるまでの軌跡を少しだけ描いたお話。

そう、事の始まりは、一人のドS様からだった。

am11:00

「ん、ーー！いい天気やなー嘘みたいに晴れた空やで」

空を見上げジジ臭くそう話しすは、毎度お馴染み愛の戦士こと青葉夏輝くん。彼は、ドガつく程のSな彼の天敵1号（2号は間宮くん）の岬季春くんに呼び出されていた。

「しかし、季春の奴遅いな…人を呼び出しどいて遅れてくるなんて、アイツには常識つてもんはないんか！…ま、アイツにそんなもんあるなら、この世に戦争なんてもんは存在せえへんけどな。それぐらいアイツは、非人道的つてことや。」

一人で喋つて、一人で納得する夏輝くんは、端から見れば不審者同然でした。そんな夏輝くんは、周りの人達が奇異な目で自分を見るなんて思いもせず、今か今かと季春くんの到着を待ちました。それから1時間後、季春くんは悪びれた様子もなく夏輝くんの前に現れました。

「悪い、待った？」

「ううん、全然！俺も今来たとこ……って、なんでやねん！…そんなに言つと思つなよ…！ハゲがつ…！何爽やかに登場してんねや？『待つた？』って、待つてるに決まつてんやろ？が…？お前が指定した待ち合わせ時間何時か言つてみい！…！」

爽やかに登場した季春くんに憤慨した夏輝くんは、そう怒鳴りつけました。

「え？ 確か、10時30分じゃなかつたか？」

「せや、ほな今何時や？」

「何時何時つて、うるせーな… 時計持つてねーのかお前は…」  
「時だな。」

「その言葉をそのままそつそつ返したらあ…」

時計ぐらいで持つてゐよ、と、夏輝くんに悪態をつべ季春くんに、夏輝くんの怒りは頂点に達しました。

「は？俺、ちやんと持つてるし……ほり、ロレックス。」

「お前は、ほんまに嫌みな男やな？世界嫌み選手権があつたら間違  
いなく優勝やで。」

普通、高校生がそんなんつけるか？と、疑問視するぐらいいに金ピカ  
に光り過ぎて、文字盤が見えない高級腕時計を、さつ氣なく見せる  
季春くんに、夏輝くんは違う意味で感心し、嫌みをねじ混ぜてやつ  
言いました。

「男の嫉妬は醜いぜ？夏輝。」

「何でそつなるねん……お前今の会話のどこにそんな要素があつた  
！？」

全くもつて勘違いな季春くんの発言が更に夏輝くんをイライラさせ  
ました。

「てかな、季春。お前、俺に10時30分に来いってぬかしといで、  
何で1時間30分も遅刻しどんねや！？ああ、！？返答次第じゃ、

お母さんはお前をシバキまわすからな？」

「お母さんって…やめろ、お前が、俺のお袋なんて考えたら反吐が出来る。確かに、10時30分に来いと伝えたが、それはお前が来る時間であって、俺が来る時間じゃねえ。」

「んやと『アーッ！』俺かでお前の何十倍もの反吐が出るわーーーとか、何言つんてんの？自分、意味分からへんわ。」

季春くんの言つている事がわつぱり理解出来ない夏輝くんは、ちやつかり季春くんの『反吐が出る』とこつ言葉に、上乗せせる事を忘れずに、そう尋ねました。

「俺は、更に何百倍の反吐を出す。意味が分からないつて、俺の言つたことが理解出来ないお前は猿以下だな。いや、猿に失礼か…」

「もつ、『出る』ではなく『出す』と、半ばやけくそに、意外に負けず嫌いな季春くんが返し、夏輝くんのオツムの足り無わざを嘆きました。

「殺すぞ！…こんガキヤ！！！誰が猿以下や…なつりやんはもつと賢い子や…！なんなら通知表見せたるで…！」

「こりん、体育以外2が並んでる通知表なんて面白くも何ともない。」

「

「何で知つてんねん…? おま、お前… わては勝手に見よつたな…?」

季春くんの言つた、『体育以外2』発言が、図星だった夏輝くんは、季春くんに詰め寄りました。

「見たんじゃねえよ。見えたんだ。誰が好き好んでお前の通知表なんて見るか、お前になんて微塵も興味ねえよ。死ね」

「ちよつと、そこまで言わんでもえんちゃうへなっちゃんの心ついて結構打たれ弱いんやで? ガラスみたいに纖細なんやで?」

まるで、苦虫を潰したかのような表情でそう吐き捨てた季春くんは、ちよつぴり泣き声になつた夏輝くんでした。

「だから、俺が言つてんのは、お前がここに来る時間は確かに10時30分だが、俺がその時間にここへ来るとは、一言も言つてないつて事。つまり、何時に来ようとも俺の勝手。分かったか? 馬鹿」

「な、ななな、何やねんソレ! ? セやつたら何で俺に10時30分つて言つたんや! ? お前が来る時間に呼べば良かつたんちゃうんか! ? 4円言つても、まだ寒いねんぞ! ? 風邪でも引いたらどう責任とつてくれんねや! ?」

「馬鹿か？お前が俺と同じ時間に来たら何にも面白くねえだろ？」「お前が寒空の中1時間30も俺を待ち続ける事にコーモラスが存在するんだろ？」「少しほそ心配いらねーよ。お前は風邪なんて引かねーよ。なぜなら馬鹿だからだ。」

「もう殺す、今殺す。お前を、閻魔大王の所へ送り届けたる……」

「どうが光る季春くんの発言に、夏輝くんの殺意は999上がりました。しかし、そんな夏輝くんには田もくれずに、季春くんは本来の要件を話し始めました。

「お前と無駄話をする時間は俺には無いから、わざわざ本題に入るべ。わざわざ花木優にあつたんだけ……」

「ああ、…お前、散々無駄話しあって、よくもまあ…ん？優ちゃん？」「

「わ、わざわざ来る途中にあつたんだけど…夏輝、お前に朗報だぜ。」

季春くんに憤慨していた夏輝くんでしたが、愛しの優ちゃんを聞いて、そんな事はどうへやらなのでした。

「優ちやんと何話したんや！？朗報つて何ーー？」

「落ち着け馬鹿……いいか、よく聞けよ？」

「あ、ああ……」

「花木優は……」

「優ちやんは……」

「お前が……」

「俺が……？」

「死ぬほど……」

「し、死ぬほど……」

「好きだつてよ。よ……」

「嫌い……つて、え？」

「嫌いじゃねえよ。好き。OK？」

「す、す、す、すきイ！？」

てつぱり、死ぬほど嫌いと言われるもんだと身構えていた夏輝くん

は、それとは反対の答えが返ってきて、何を言つてこるのか直ぐには理解出来ませんでした。

「えつー?ええー!優ちゃんが俺をー?せやかで、間宮なー優ちゃん、間宮、えええー?」

「間宮こー、程々愛想が尽きたらしきぜ?まあそりだらうな、あんな扱いされちゃあな。それで、よくよく考えてみたら、お前の良さに気付いたんだってわ。良かつたじやねえか。両想い

「あ、おおきこー苦節17年愛を探し求めてやつといひ田会えたー!ー!あつたー!ー!実にあつたー!ー!」

「あ、そうだ。お前に告白したいとか言つてたつけな。」

「ー!告白ー!マジでー?どなこしうつ季春ー?俺、ビリじた!らええんー?」

「馬鹿野郎、男が女に恥かかすんじゃねえよ。だからお前はモテないんだよ。わざと彼女んとこ行つてお前から告つてこ馬鹿。」

季春くんからのやけに氣の利いたアドバイスに、成る程、と、納得した夏輝くんは、愛しい愛しい優ちゃんの元へと駆け出したのだった。

「やつぱりアイツは馬鹿だな。今日が何の日か気付きもしねえ。嘘  
に決まつてんだろ」

夏輝くんの後ろ姿を見送りながら、季春くんが満面の微笑みを浮かべてそう吐き捨てた。

そんな事とはつゆ知らずな夏輝くんが、この後、同じくつゆ知らずの優ちゃんに、ボコボコにされ病院送りになるのは、田に見えていたのは必至でしたとや。

終  
わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8134d/>

---

間宮くんと災難日記 番外編

2010年10月9日15時04分発行